
真・恋姫夢想 ～最強の頭～

坊屋春道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫夢想 最強の頭

【Nコード】

N0590T

【作者名】

坊屋春道

【あらすじ】

中国地方最大の連合、中国連合初代本部長兼
鬼龍爆撃隊初代隊長（鬼龍忠虎）

ある日引っ越しをすることになった鬼龍
とある理由で警察から逃げる事になった鬼龍はとある理由でバイク
ごとくみへ。

そして気が付いたら恋姫の世界へ旅立っていた。

初めて投稿します。駄文ですが見てください

最強の族 お祭り騒ぎ(前書き)

初めての作品です まー見てください

最強の族 お祭り騒ぎ

「今日でこの町ともお別れかー」

ある展望台の上で一人の青年がそうつぶやいた

この町で族の頭をやっている鬼龍きりゆう 忠虎ただとらだ

中国地方全体にその名を轟かす暴走族 鬼龍爆撃隊の頭であり
鬼龍爆撃隊を頂点とする中国連合の本部長であり岡山部隊隊長
その鬼龍 忠虎が明日この中国地方を離れ九州の
鹿児島にある叔父の家に引っ越すことになったのだ

「今日で中国連合の鬼龍も鬼龍爆撃隊の

鬼龍も中国連合岡山部隊隊長の鬼龍も終わりだ」

そしてしばらく黄昏ていたら後ろから声がした

「なーに黄昏てるんですか鬼龍さん」

声の主は中国連合広島部隊隊長北郷一刀

こいつとは昔からよく喧嘩してきた。

なんで俺のことをさん付けで呼ぶかというところ

こいつがが支部長でおれが本部長だからだ要は階級が違うとゆうわけだ（俺が一個年上ってのもある）

「なんだ、馬鹿か」

「馬鹿はないでしょ」

「いやなー明日にはこの町とおさらばだなー、さびしーなーって思
つてさ」

「黄昏るのもいいですけど早くして下さいよー鬼龍さんが来ないと
パーティー始められないんですから」

「ああ、もうすぐ行くよ」

「じゃ、先に行って待ってます」

そう言う一刀は去って行った

「さーて、俺も行くかー」

そう言うて鬼龍は愛車のゼファー1100に乗り込み集合場所にバイクを走らせた。

「えー今日は俺が引っ越しをするっつーことでみんなに集まってもらったけど

特に特別なことをするっつーわけじゃあねえとにかく飲んで食って騒ごうぜ」

『うおー、』

く30分後く

「うおえ」

「大丈夫か鬼龍」

「頭がかち割れちまいそうだ」

こいつは中国連合山口部隊隊長 里山 えーつとしたの名は・・・
忘れちった☆

「おい鬼龍今ものすごくお前を殴りたいけどいいか？」

「え、なんで？」

「いいからこの信義に殴らしてくれ」

「そうかお前の下の名は信義だったのかー そして殴られるのは拒否する」

そう言うて鬼龍は走り出してしまふ。

「待てこらー」

鬼龍達は明日お別れの悲しみを振り払うかのように
バカ騒ぎをやっていた。

この後彼らに何が起こるのかも知らずに。

最強の族 お祭り騒ぎ（後書き）

次回 最強の族 「大乱闘」
お楽しみに！！

最強の族 大乱闘（前書き）

第2話です

お楽しみください。

どうぞ

最強の族 大乱闘

「くそ！何でこんな事にんなっちまったんだ

「いやー良いじゃないですかこの町最後の夜らしくて」

「まー、そりゃそうなんだけれど」

いま俺たち中国連合幹部&鬼龍爆撃隊幹部は警察に追われている。

（回想）

「おらー鬼龍、勝負せんかい」

「鬼龍さん、あれって確か・・・」

「ああ、確か香川の死刑隊それと死刑隊総長 谷橋」

「でもよー鬼龍、四国の族と俺ら中国連合は不可侵協定を結んでいるはずじゃー」

「ああ、2年前に結んだはずだが、何でだ？」

「鬼龍聞いたぜー明日九州に引っ越すんだってなー」

「何でテメーがそれを知ってんだよ」

「今はそんなこと関係ねーだろ、この町最後の日を派手にしてやろうと思ってな」

「嬉しー事してくれるじゃーねーかよ えー谷橋さんよー」

「派手な最後をプレゼントしてやんよー 行くぞテメー等」

『うおー』

「最後の最後まで俺の無茶に付き合わせて悪いなみんな」

「気にしないで下さいよ鬼龍さん」

と北郷

「テメーには最初から最後まで振り回されてばかりだな」

と里山

「ま、それが鬼龍らしーんだがな」

と中国連合鳥取部隊隊長 鳥山

「俺らから何も送る物がねーからよせめて最高の思い出をプレゼントさせてくれい」

と中国連合島根部隊隊長 池田

「気色わりーんだよ池田コノヤロー」

『はっはっはっは』

「最高の思い出にしよーぜ！！死刑隊上等ぶっこむぞー」
『うらー』

死刑隊総数200人迎え撃つは中国連合幹部連・鬼龍爆撃隊幹部
連総数20人

これが中国地方・香川で語り継がれる大乱闘 児島の乱闘である

「あたー！！」

「アベシ」

北斗の拳風に鬼龍は相手の鼻づらに正拳をみまてやった

死刑隊の半分は鬼龍が片付けている。その勢いはとどまらない

「ば、化けもんだー」

『ようやく分かったか俺らの頭は化けものなのだーわははは』

「無駄口叩いてないでテメーらも雑魚掃除手伝え」

「いや、俺らは頭の鬨いを見物しますんで」

鬼龍のところの幹部は実力は鬼龍並みなのに
大抵鬼龍が片付けるから戦わずにすむのである。

そうしてるうちに30分

ファンファンファン

「頭ーマッポだ」

「総長ポリ公だ」

「谷橋ー最高の夜をありがとよ」

「けっテメーの首を取れずに終わるのが心残りだぜ」

「俺の首がほしかったら鹿児島にいつでも来いよ・・・」

「鬼龍・・・元気だな」

「谷橋テメーもな・・・」

「頭ー逃げるぞー」

「総長つかまりますよっ!!」

『ああ、今いくよっ!!』

ブンブン パパパパ パパパパー

ー回想終了ー

「うっ」

「どうしたんですか？ 鬼龍さん」

「いやっさっきの乱闘で刺されてな」

「大丈夫か鬼龍」

「ああ何とかな」

ぐにゃり

鬼龍の視界が曲がりくねったかのように見えた

「えっ」

どうやら血を流しすぎたようで

鬼龍は激しい目まいに襲われた。

そしてバイクの行先には海があつた・・・

最強の族 大乱闘（後書き）

第2話です

お楽しみいただけましたでしょうか

次回 最強の族 地獄篇

最強の族 地獄篇(前書き)

だいぶ投稿が遅れてしまいました
すいません

愚兄のせいでp cが使えませんでした
ではお楽しみください

最強の族 地獄篇

「「「鬼龍」」」

『頭』

「けっ、俺の人生もここまでか、短かったけど充実した人生だったな
心残りは中国連合の皆や鬼爆隊の皆に何も残してやれないことだな
この手紙だけでも残して逝ってやるか―」

パサ

「鬼龍さん！今助けに行きます」

「やめとけ北郷」

「何ですか！？今助けに飛び込めばまだ助かりますよ！？」

「あいつは致死量の血を流してる・・・それにあいつが飛び込んだ
のは海だ

傷口に海水がしみて助かる確率は0だ」

「そ、そんな う、うそだ 嘘だ―」

鬼龍忠虎死す!!

このニュースは翌日には北は青森 南は九州の不良に知れ渡った
鬼龍忠虎はこの世での使命を果たし死んでいった。

く地獄く

「う、うゝん」

「おい、起きろ」

「もうちよつと寝かせろバカ」

ブチッ

「いい加減起きろコノヤロー!!」

「アベシー」

「ふうようやく起きたかこの馬鹿者めが」

「何すんだこのや・・・ろ・・・」

何すんだコノヤローと鬼龍は言いたかったのだろうか

「ん、どうした？」

「いやー綺麗でかわいい人だなーと思ってさ」

そう鬼龍の目の前で仁王立ちしていたのは

ミスコンで優勝できるくらい的美女だったのだ!

カアアア

「な、何を言うんだ貴様は　わ　私がきれいだななんてふざけるな」
「いやいや十分綺麗ですよ」

こんなやり取りを5分間

「本当の本当に信じていいんだな」

「ええ、もちろん」

「初めてかわいって言われた・・・」

「うーん、この男どもは女を見る目がないな・・・ところでここはどこだい？」

「あっそうかお前は死んだばかりだったな、だったな　ここは地獄で私は閻魔大王」

「はっ？死んだ？閻魔大王？・・・（頭の中整理中）・・・何と俺は死んだのか？」

「うむ」

「で、ここは地獄なワケ」

「うむ」

「なーんか日本の風景じゃーねーと思ってたけど」
「？」

「で、あんた輪閻魔大王なんだと」

「そうだこの地獄で一番偉いんだすごかろう」

『え、だったら俺は閻魔大王を口説こうとしたのかすごいことしたなーおれ。』

鬼龍は後のことを考えない男であった
そのせいでこれでもかというほど問題を起こしてきた。

「地獄に来たら地獄名物 地獄めぐりをしてもらおうか」

「おう、分かった」

「お前が各地獄を回ったら少し話したいことがある
なるべく早く回ってこい」

「ああ、じゃー行ってくるわ」

こうして閻魔大王と別れた鬼龍は最初の地獄針山へと向かった。

最強の族 地獄篇（後書き）

つまらなくてすみません
できたら感想も書いてください

最強の族 地獄篇2（前書き）

最近クローズを1巻から読み返してみただけど
高橋ヒロシさんは天才だと思います

皆さんも読んでみてください

最強の族 地獄篇2

針山

「うへー、痛そうな針がびっしりあるな」
鬼龍は見ただけで痛そうな針がびっしり生えている山を見上げ
途方に暮れている

「おうこら、早く昇らんかいコノヤロー」

「あんたは？」

「俺はこの針山の番鬼だ」

「番鬼？」

「俺は人じゃなく鬼だから」

「ああ、なるほど」

「それより早く昇らねーと無理やり昇らすから早ー昇れ」

「へいへい」

鬼龍が返事をするとう鬼は後ろを向いた

「（よし今だ）」

鬼が後ろを向いた瞬間鬼龍はベルトとズボンの間から30センチほどのボルト

を取り出して鬼の後ろ頭をたたいた

「うおー」

「ぎゃあああ、テメーいったい何を」

「俺は痛いのが嫌ーだし急いでっからよーテメー俺を担いでこの山昇れ」

「誰がそんなことするか!?!」

「埋められてーのか？」

「昇らせてもらいます」

鬼に山に登らせること20分

「ひいひい」

「うん、ありがとう」

「はあはあ」

「体力ねーなー、俺が鍛えてやる、ついてこい」

「ま、まってくれ、俺は、はあはあ、俺はこの番鬼だから

持ち場を離れられない、代わりに腹減ってねーか？減ってたら食わしてやる」

「いや、減ってねー」

「そ、そうかだったらこれをやろう」

そういうと鬼は懷から古びた紙を取り出した、その紙には現世とを同じ世界地図が

書かれていて。そして右上に地獄と書かれていた。

「何で地獄なんか現世の世界地図があるわけ？それになんか地獄って

危なっかしー文字が書いてあるのは俺の気のせいかな？」

「いや、勘違いでもなんでもねーそれは正真正銘の地獄の地図だ」

「はー！？何で地獄の地図と現世の地図が一緒なんだよ」

「うっせー！！何で地獄の地図と現世の地図がいっしょじゃーダメなんだ」

「は！確かにべつに一緒でも何の問題もない」

「だろ、いいからこの地図を見て地獄をめぐってこい」

「わかった、あんた顔に似合わない人だな」

「だろー、じゃー行って来い」

「ああ」

こうして鬼龍は針山地獄の鬼からもらった地図をもとに

いろいろな地獄を回りそして必ずその地獄の番鬼を倒して行った
風地獄では風神を後ろ回し蹴りで倒し

雷地獄では雷神をドロップキックで倒し

血の池地獄では番鬼を埋めると脅し、自分を担がせておよがせ

釜ゆで地獄では番鬼を背負い投げで釜に放り投げ煮込み

移動中に地獄界NO1の強さを誇る冥王龍をフランケンシュタイン
で倒し

数々の伝説を築きあげてきた

そして地獄を回るうちに仲間ができた

風神の息子 風鬼

雷神の息子 雷鬼

冥王龍の息子 破龍

この3人は父と鬼龍の壮絶な戦いを見て鬼龍の強さに惹かれていた
のである

この3人が後に鬼龍とともに恋姫夢想の世界をかえていくのはまだ
後のお話

最強の族 地獄篇2（後書き）

恋姫たちとの絡みはまだあとです

それまでつまらないでしょうがおつきあいください

A↓Sさんいつも感想ありがとうございます

鬼龍達を董卓軍につけるか反董卓連合につけるか悩んでいます
どちらがいいですか？ 感想と一緒に書いてください」

最強の族 地獄篇3 (前書き)

なんかだんだん鬼龍が無茶苦茶になってきたような
だが後悔はしていない

駄文ですけど読んでください

どうぞ!!

最強の族 地獄篇3

「ふーようやく地獄を全部回ってきたぞ」

「（まさかこんなに早く巡り終えるとはな）」

閻魔大王が驚くのも無理はない通常なら1年かかるのに鬼龍は1週間で巡ってきたのだから

「どれどれ」

そういうと閻魔大王は懷から大王手帳を取り出した

「ほんとに全部巡ってる」

「どうよすげーだろ」

「ん、ちよつと待て」

大王はあることにきずいた1つだけ地獄をまはってないと出ている

「おい舌抜き地獄をまはっていないと出ているぞ」

「……は？」

鬼龍SIDE

「おい舌抜き地獄をまはっていないと出ているぞ」

「……は？」

おい、今舌抜き地獄で言ったか？

「ふざけんなコノヤロー！何でおれが舌抜かれなきゃいけないのよ」

「いやだって、規則だし」

「舌抜かれたらディープなキスできねーだろーが」

カァァァ

「分かったそんなに言うなら舌抜き地獄はやめだ」

「よつつつたー」

「ただし代わりにこの者たちと戦ってもらう」

パチン

閻魔大王が指を鳴らすと急に4人がどこから出てきた

好戦でヤンチャそうな少年と

眼鏡をかけたナルシスト的な青年

そして言葉では表せそうにない筋肉ダルマS

なんて濃いキャラ達なんだ。

「おい、誰がやんちゃそうだって？殺すぞテメー」

「やってみろやぼけ」

「こいつはおれが倒す于吉・貂蟬・卑弥呼手を出すなよ」

「「「わかった（わん）」」」

「ルールは簡単相手を気絶させるか地面につき伏せて

10秒経たせたほうの勝ち、よーい始め」

「しっ」

左慈のハイキックが鬼龍の首に放たれる

だがそれを鬼龍は受け止めるが左慈はその足を軸に延髄切りをくらわす

「ぐは」

その蹴りをくらって鬼龍はよろめいてしまう

「なかなかやるなーニーちゃん」

「おまえもな、普通の奴なら首が吹っ飛んでもおかしくない俺の蹴り

をくらって立つんだからな」

左慈のいうとおり通常の者なら首が吹き飛ぶ蹴りだろうな
首がジンジンしやがる

「まだまだ行くぜ鬼龍」

なに！？あんなけりがまだまだくるのか！？

左慈が宣言してからすぐに左慈のラッシュがはじまる。左右のミドルキックそして右ハイキックからの
後ろ回し蹴り

「がは」

鬼龍がうめき声をあげながら吹っ飛んでいく。

「もう少し耐えるかと思ったが、まっ、こんなものか」

左慈は自分の勝利を確信したのか、後ろを向きやがった。

「がああ」

「なに！！」

「らあー」

鬼龍が立ち上がり左慈の腹に向かって蹴りを食らわす

「ぐう て てめー」

左慈がうめき片膝について顔をしかめる

「蹴り連打のお返しだしっかり味わえや」

そういうと左慈に向かって鬼龍必殺シャイニングウィザードをかます

「まだだ、後2発残ってる！」

鬼龍はそういうと左慈を立たせ膝蹴りをかまし

最後に延髄切りで左慈は地に伏した

「なめんじゃねーぞコノヤロー」

S
I
D
E

O
U
T

最強の族 地獄篇3（後書き）

なんか左慈のキャラが・・・

だが後悔はしていない

あんまり面白くないかもしれませんが

完結まで持っていけますから

ぜひ読んでください

感想お待ちしております

新しいチーム名を募集しています 感想と一緒に投稿してください

最強の族 地獄篇 4 (前書き)

ようやく地獄篇が終わった・・・

次話から恋姫の世界だからすんげー不安

終わりまで話を持っていくんでできればおつきあい下さい

最強の族 地獄篇 4

「ま まさか左慈がやられるなんて」

「信じられないわねん」

「なかなかやるのう」

左慈と闘い最初は押されていたがブチ切れてあつという間に勝利した鬼龍をとてもおっかない奴と確認した于 吉達は鬼龍と戦うのは嫌になった

「次に俺とやるのはだれだ？」

「私はやですよ」

「うわたしは断るは」

「わしもじゃ、殺されてしまう」

何も殺したりしねーよと思う鬼龍だったがさっき倒した

左慈がいまだに目を覚まさないので少し不安になってきた

「どうする閻魔ちゃん残りの3人はビビってるぜ」

「うむう、あの左慈を完膚なきまでに倒したのだから残りの3人はよからう」

「サンキュー」

「（この3人がやられたらこの地獄のならず者たちを抑えられんかな
らな

それに左慈と互角に戦えれたら上々だと思ってたしね）」

「どうしたんだそんなに考え込んで」

「いや、それよりもこれからお前にはある異世界に行ってもらう」

「分かった!!」

「「「はや!!!」」」

「おうでは早速今から行ってもらおうから」
「ちよつと待ってくれ俺らも連れて行ってくれ」
「うーん・・・いいよ」
「「「ありがとうございます」」」
「では行つてこい」
「いきなりかいのわ————」
「「「ぎいいいや————」」」

「行つたな」
「ああ」

いつの間にか目覚めていた左慈と閻魔大王は遠い目をしながら鬼龍・
雷鬼・破龍・風鬼
の無事を願っていた

地獄篇

終

最強の族 地獄篇 4（後書き）

すんげー急いで書いたから駄文ですいません

でわ次話でお会いしましょう

最強の族 キャラ設定（前書き）

更新していくうちにあることに気づきました
キャラ設定書いてねー

急ぎよ考えました

おかしいなと思った人は勘弁してください

最強の族 キャラ設定

鬼龍 忠虎

髪型 ショートヘアやロングヘアなどよく変える今は金髪坊主

タバコ セブンスター

服 特攻服 ライダース スカジャンなど グラサン

(右手に鬼

左手に龍 左肩に風神右肩に雷神の入れ墨) 体中に無数の傷

バイク 黒のゼファーにファイアパターン ターボを組んでいる

紅蓮のZ? (湘南純愛組の真樹並みのスピード)

この2車は恋姫の

世界に来るときガソリンが切れなくなった

闘い方 1対1の時は大抵素手 多勢対1の時は武器を出して暴れるとにかく暴れる何が何でも暴れる

とにかく暴れる何が

何でも暴れる

鬼龍爆撃隊初代総長兼中国連合初代本部長(岡山支部初代支部長)
昔暗い過去を持つ

喧嘩はクローズのリンダマンの2人分の力

喧嘩は50回やったとして負けたのは3回そのうち1回は不意打ちによる敗北

しかし1対1の時は必ず勝利する

破龍
鬼龍の呼び方 兄貴

髪型
金髪のパンチ

タバコ
マルボロ

服
ボンタンにさらしが基本全身を覆う入れ墨が基本 時折グ

ラサン

闘い方
1対1の時は素手（空手）

多対1の時は術を使う 強さは鬼龍より劣るがそれでもかなり強い

風鬼
鬼龍の呼び方 頭

髪型
黒か金のオールバック

タバコ
CABIN

服 アロハにボンタン 袖なしシャツ（基本黒 背中に文字入り）
時折文字入りマスク

闘い方 柔道と蹴り技が基本

あまり闘いや戦は好きじゃない 敵が仕掛けてこなかったら大人しい

ブチ切れたら呂布と鬼龍で何とか抑えられる

雷鬼 鬼龍の呼び方 ボス

髪型 丸刈りにカミソリで右に雷左に鬼とそっている

たまにタオル（赤 青 黒）や幅広で長い鉢巻を巻く

タバコ マイルドセブン

服 黒地に白文字で雷鬼と書かれている柄シャツを好んで着る

闘い方 プロレス技をよく使い好戦的

この4人は男には鬼のように強いが（鬼龍以外はすべて鬼）余程のことがない限り

本気を出さない女と戦う時は禁力（一個で一割力を抑えられる）の

指輪を

つけて戦う
する)

鬼龍以外は全員火手から出せたりする（火も吐いたり

最強の族 キャラ設定（後書き）

どうでしょうかここをこうしたらどうよと思ったたら

感想のところに書いてください

（注）タバコは20歳になってから

感想に止めてしまえ的なことを書かれたら

豆腐のように柔らかい作者の心はすぐ崩れます

感想お待ちしています

最強の族 恋姫編（前書き）

次回ようやく原作キャラとからませれるはず

最強の族 恋姫編

やあ皆俺は鬼龍忠虎ひよんなことからバイク事故で海に飛び込みきずくと

地獄にいてそこらじゅうの鬼を倒したどこにでもいるごく普通の暴走族総長だ

ヒュー

「「「ぎゃ——」」」

「うわ——」

チュドーン

「いってー」

「あつつ」

「ぬおおお」

「フガフガ」

空から降ってきた破龍 雷鬼 鬼龍は無事着地したからよかったが
風鬼だけは地面に突き刺さっていた

「しゃーねーな ヨット」ずば

「ふーこっちの世界に来てからいきなり死ぬかと思ったぜ」

「そーなったら大変だな」

「そーだな」

「そーじゃのー」

「で、これからあんたの事なんてよびゃーいいんだ」

「そーだな、いつまでもあんたとかだったらいいけんモンな
タバコくれる？」

「マルボロでよかったら」

シュボ「ふー、あんがと好きなように呼んでくれ」

「だったら俺は兄貴で」「じゃーおれは頭で」「おれはぼすで」

「わかった、呼び方変えたきゃー変えていい

それとせっかく地獄の次世代を担う猛者たちがそろったんだから
チームを作ろう」

「」「チーム？」「」

「そうだ、この世界のどんな暴れん坊やボンクラ、バータレどもに
も負けない最強のチームを」

「面白そうだな俺は乗った」

「俺も暴れてーし乗った」

「おれはあんまり争い事とか嫌いだけどそっちのほうが退屈しなさ
そうだ 乗った」

「なら決まりだ、そーとなったら近くの村で飯食って寝床確保して
これからどうするか、旗を作ったり、シンボルマークを決めたり
しよう」

「」「賛成」「」

こうして後の世まで語り継がれる最強 最高のチームはたった4人
の男から結成されたのである

最強の族 恋姫編（後書き）

なんか鬼龍が立ち上げたチームが武装戦線見たくなりそうな気がする

最強の族 恋姫編2（前書き）

久しぶりの投稿です
ま、読んでください。

最強の族 恋姫編2

フォン フォン

この時代の荒野にはあるはずがない乗り物が2台走っている
それは地獄の世から降ってきた鬼龍の愛車ゼファーとZ?である

「まさか2台ともガソリンが切れることがないようにしてあるとは
閻魔ちゃんもいい事するな」

「その閻魔さんから 何個か指輪預かって 手紙によるとこの倉
と書かれている指輪

は想像した武器が大体出てくるそうです そしてこの禁と書かれ
た指輪は1つこで本気の1割

抑えられるそうです」

長々と説明するな、こいつはと思う鬼龍であった

ゼファーに乗るのは鬼龍と風鬼

「閻魔さんから聞いた話ではこの世界は三國時代で主要人物がほと
んど女だそうです」

「それなら俺も聞いたぜ、何でも真名ってーのがあって許してない
相手がその名を呼ぶと

ぶっ殺されるらしいで」

Z?に乗るのは雷鬼そして破龍

「ふーん」

なんとも思っていないように返事する鬼龍ではあったが内心とてもず
っとびくびくしていた

(名前をうっかり呼んだだけでぶっ殺されるなんてなんておっかな
い世界なんだ!!)

なんて思っているのは鬼龍だけではない地獄の3人衆でもある

「あ、頭ようやく村が見えてきました」

「よっしゃーだったら村まで全速力だ！」

「「応」」

この村に立ち寄ったことが大陸中に鬼龍爆撃隊の噂を流す要因となる

（田舎村）

「おうおやじこの酒3樽くれや」

「おう、ちよっと待っとれや」

にしてもあいつら兄貴分の俺に酒買ってこさせるなんて

まーじゃんけんで負けた俺も悪いけど

「ほいお待ちせ」

「お、あんがと それと聞きてーんだけど何でこの街こんなに人がすくねーんだ？」

「そりゃー、あの山に30人くらいの賊がいてなみんな恐れてあんま外に出たくねーんだ」

「ふーん」

賊か、やっぱりほっとけねーな

今現在鬼龍はじゃんけんで負けたせいで地獄の3人衆の酒の買い出しに来ている

「ん、そうだついでに肉まんも買っていくか」

そう思いついた鬼龍は饅頭屋に足を運んだ

「なんだこの人だかりは？」

饅頭屋の前には人だかりができていた

その中央に褐色肌に触角のような髪がピョコツと出ている女の子が饅頭を見つめていた

この状態で声をかけるのにはかなりの勇気がいるだろう

だが鬼龍はそんなことはお構いなしに声をかける

「お前何やってんの？」

「……………（ジー）」

「肉まんがほしいのか？」

「……………んっ（コク）」

なんかスゲー見てるだけで癒されるなこの子

鬼龍の心はこの子の眼差しでかなり清浄化されたはずだ！！

鬼龍はいつもいろんな奴と喧嘩して来たから心が癒されることが少なかった

だが彼女のおかげで心から癒されたことだろう

「ただいま」

「お疲れ様っす」

「わーい酒だ」

「肉まんもあるぞ」

「「わーい」」

パクパクモグモグ（食事中）

「ところで旗どうします？」

「確かにそうだな」

「忘れとった」

「そんな話し合っただけ？」

「「もう忘れたんか！」」

「嘘だよ、買い出しに行っとなる間に考えとった
そこでどんなチーム名がいいか聞きてー」

「うーん やっぱクローズから武装戦線かな」

「ワーストから百鬼か慚愧の虎はどうです」

「いややっぱ湘南純愛組から殺戮部隊もしくは暴走天使でしょ」
ミッドナイトエンジェル

「……………なんでお前ら現世の漫画しってんだよ」

鬼龍はまさか地獄にも本屋があってクローズ ワースト 湘南純愛組が地獄の本屋
の大ベストセラーで新刊が出るたびに整理券が必要になる時がある
とは知らない

「確かにそれもいいがやっぱこれだろ」
そういうと鬼龍はポケットから綺麗に折りたたまれたでかい布をだし
広げて見せた

「」「ごっこれは!!」「」

最強の族 恋姫編2（後書き）

旗の絵を乗せたいんだけど

絵の才能がないんで誰か挿絵を描いてくださる人を
募集しています

最強の族 恋姫編3（前書き）

やっぱりストリートビーツは最高だと思います
皆さんもユーチューブで聞いてみてください

オススメは少年の日 ハッピーボックスを探してです

最強の族 恋姫編3

「「こ、これは」」

鬼龍がポケットから出した旗は現世で鬼龍爆撃隊が使っていた旗だった

「これがおれが現世で総長やってた族の旗だ族の名は鬼龍爆撃隊、この鬼龍爆撃隊をチーム名に使いこの旗をチームの旗として使おう」

「だったら俺らにチーム名聞いた意味ないですか？」

「うん」

「「（言い切ったよ!!）」」

それから鬼龍と地獄の3人衆との微笑ましい言い合いが始まったが30分で終了した

そして今はこれからどうするかという重要な話し合いの時である

「で、頭これから俺たちはどうしますか」

「ああ、この村の近くに30人ほどの族があるらしい そいつらを倒し

吸収 そして訓練そういうのを繰り返し傭兵みたいなことをして

行こう」

「分かりました」

「じゃーそうしましょう」

「そうと決まれば早く飯にしましょう」

「応 分かった それじゃ手を合わせていただきます」

「「「いただきます」」」

それから地獄の3人衆たちはいっぱい食べ

鬼龍が自分が食う暇がないほど料理を作らされた

そして

シュボ「ふー、あいつらようやく寝たか」

今鬼龍は地獄の3人衆にできる限り料理をふるまい3人とも眠りに
ついたことを確認し

自分用の料理を作り外に出てタバコを吸っている

「うん、相変わらず俺の料理はなかなかの味だな!」

鬼龍の両親（仮）は共働きで帰ってくるのは鬼龍が寝ている時であ
り鬼龍は自分一人だったら

別にコンビニ弁当でいいのだが小学生の弟にはいけないと思って自分で作りだしいつの間にか店を構えてもおかしくない腕前になっていた

そしてなぜ外にいるかというとき鬼龍は時たまこうして一人外に出てから
タバコを吸ったりするのが好きなのだ

鬼龍が一人自作のめしをつくっていると昼間にあった女の子にあった
じー「・・・」

なんか俺の飯に視線がロックオンされてるんだけど と思う鬼龍

「くうか？」

「・・・ん」 パクパク モグモグ

「・・・？」

「いやなんでもない 食い続けてく・・・（いつの間にか俺の飯がなくなってる！！）」

「・・・まだほしい」

「そうか分かった ちょっと待っていてくれ すぐ作ってくるから」

そう言い残すと鬼龍は調理場に向かった

最強の族 恋姫編3（後書き）

なんか原作キャラとどうからませていいかわからない
ですが書きつづけます！！

なんか毎話短いような気がします

作者は体育の時間にバレーのネットの鉄柱に後ろ頭をぶつけて血を
流しました

感想をお待ちしています

最強の族 恋姫編 4 (前書き)

更新遅れてすいません

やっぱり気分で小説を書こうとしたのがいけなかったのか？

最強の族 恋姫編 4

「うおーらー」

今鬼龍は調理場で一心不乱に料理を作っている
メニューは麻婆豆腐 肉まん 炒飯 棒棒鶏 などなど
を一生懸命作り

「おーいお待たせ」

鬼龍は大量の料理を抱えてやってき

「・・・あれ？いない？どうしよ」

作った料理を食ってくれる人がいないことに戸惑い

ぐ——

「なんだ！獣か！！」

「・・・料理来た」

「なんだ腹の音か」

いきなり聞こえてきた腹の音にびっくりして

「いただきます・・・」

「どうぞどうぞ」

（食事中）

「パクパクモグモグハグハグ」

「（い、癒される——）」

今は目の前にいる女の子の食事風景に癒されている

そして鬼龍は少し驚いている

「（あんなにいっぱい作ったのにもう半分になってるよ）」

「もぐもぐ・・・食べる？」

「イエイエ 俺は後からいただくからどうか食べ続けてください」

「・・・分かった」

そして食べ続けること数分

鬼龍がこれでもかというほどたくさん作った料理はあっという間に
なくなっていた

そしてそれをほとんど一人で食べつくした人かというと

「・・・ごちそうさま」

「はいはいお粗末様 お茶どうぞ」

鬼龍が出したお茶を鬼龍と一緒に飲んでしみじみして

「おまえ なんて言う名」

「ああ、俺は鬼龍 忠虎あんたの名は？」

「恋は呂布・・・字は奉先」

「鳳仙？」

と鬼龍冗談を言う

「違う・・・」ぎゅーっとおもいつきりほっぺたをつねられてしまった

「いだだだだだ ごめんふざけてた」

「・・・許す」パツ

「アー痛かった えーっと奉先でいいんだよな」

「（コク）・・・ん それから恋の真名は恋」

「え 真名って人にそう簡単に教えちゃーいけないんじゃない？」

「おまえになら預けてもいい」

「なんかわからんけどありがたくいただきます」

「ん、それじゃお休み・・・」

「ほい お休み ふあー俺も寝よ」

とこんなやり取りをやっていた

そして鬼龍は

寝た

最強の族 恋姫編4（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想はいつでもお待ちしております

最強の族 恋姫編5（前書き）

前回更新してから今回までたくさんの日数があったのに
なんて駄文なんだろうと痛感した作者

誰か作者に文才をください

最強の族 恋姫編5

ここは鬼龍達が止まっている宿の鬼龍の部屋

グーグーガーガースースー

「むにゃむ……ん！」ガバ

いままで気持ち良さそうに寝ていた鬼龍が急に眼をさました

「外がなんか騒がしい……」

そういうと鬼龍は外を見ると遠くに松明の明かりが見えた

不思議に思った鬼龍は倉と彫られた指輪から双眼鏡を取り出し覗いてみるとそこには

賊が今にも略奪を開始しようとしていた。

「こりゃーやべーな あいつら起こさねーと」

そうして鬼龍は急いで破龍達が寝ている部屋に入り破龍達お蹴り

「テメーラ起きろ！この世界に来て初めての喧嘩だ」

「どうしたんですか」

「相手は？」

「賊だ」

「数は？」

「300」

「初めより数が増えてませんか？」

「たぶん近くの仲間も加わったんだろう」

「「だったら俺らがすることは」」

「もちろんあいつ等に鬼龍爆撃隊の名を覚えさせること」

「「「だろうな」」」

そうすると鬼龍達は外に止めてある單車に乗り込んだ

そしてエンジンをつけ今にも行こうとしているところに宿の主人が通りかかった

「あんたらなにしてんだ？」

「村の近くに賊が300人くらい居てなぶっ飛ばしてくる 親父さん丸くて長い木の棒があるか？」

「あるけどなんに使うんだ？」

「雷鬼俺の部屋から鬼龍爆撃隊の旗と革ジャンもってこい」
「はい！」

そうしてしばらくしてから雷鬼が戻ってきた

「あんたら4人だけで戦うのか？」

「あんたも来るか？」

鬼龍は革ジャンを着ながらそう聞くと

「いやだ だが帰ってきたら飯を奢ってやる」

「あんがと 雷鬼この旗もて」

雷鬼に鬼龍爆撃隊の旗を持たせ

「さっきも言ったがこれが俺たち初の喧嘩だ派手に行こうぜ」
「「「しゃーーーーー」」」

フオオオン

今鬼龍達は單車を走らせながらこんなことを話している

「頭　ところでなんか作戦あるんですか？」

「ないって言ったらない　あるっていったらある」

「どっちなんすか!？」

「まー聞け　雷鬼ここで飛び降りろ」

「はっ?? どうして??？」

雷鬼が? マークを頭の上に5個ほど浮かべているので作戦を話す鬼龍

作戦はこう　鬼龍　破龍　風鬼が300の敵を相手に暴れ

鬼龍達を取り逃がした奴らを雷鬼が仕留めるというあまりにも簡単な作戦

だが雷鬼たちは

「なるほどこの作戦を破るなら諸葛亮か周瑜を連れてこなきゃいけない」

「（こいつは限らない馬鹿だ）」

「というわけで 飛び降りろ」

そういうと鬼龍はいきなりジャックナイフターンをかまし

「うわ——ぐふ」 吹き飛ばされる雷鬼

「というわけで 行くぞ」

「「お おう（おっかねー）」」

新生鬼龍爆撃隊初の喧嘩はもうすぐ始まる

最強の族 恋姫編5（後書き）

次話から戦闘シーンに入るんですけども緊張します

感想を誰か書いてくださーい

最強の族 恋姫編 6 (前書き)

今回はとてつもなく出来が悪いです

そんなのきにしねーバツチこいとゆー方だけ読んでください

最強の族 恋姫編 6

「ん、朝か・・・」

あの賊の頭とのタイマンから一晩明け鬼龍達は目を覚ました
そして飯を食べるため一階に下りると

「何でテメーがいるんだよ」

「いやー俺はあんたとの一对一の喧嘩で負けたからあんたの下に付こうと思ってこうやって挨拶しに来たんだ」

「そうか：俺の名は鬼龍 忠虎 鬼龍爆撃隊初代総長だ」

「分かりました俺は性を王 名を情と申します本来この時あなたに預けるべき真名

は親につけてもらいう前に賊に親が殺されたのでありません」

「そうかつれーこと思い出させたな 俺みてーなボンクラが勝手にそんな

大切な名をつけるのはいけねーだろうな・・・そうだ本当の仲間
にしか

よばせねーあだ名をつけてやろう」

「それってあんまり真名と変わらない気が・・・」ぼそ

そう王情がつぶやいたのはもちろん王情は聞き流し一生懸命名前を
考える鬼龍

考えること10分

そして鬼龍は急に閃いたのである

「俺の居た世界じゃー王はキングだったからテメーのあだ名はキングジョーだ」

「きんぐじょーなかなかいい名ですね、じゃーそれにします」

こうして王情のあだ名は鬼龍の閃きによりキングジョーになったとき
そしてお互いの話をしてお互い生みの親の顔を知らないのとお互い
彼女が
ほしいのにウブなのとかお互い分かり合えるところが一杯あったので
すぐ打ち解けた

そして仲良くなった記念に鬼龍が料理を作りキングジョーにふるま
ったとき

キングジョーはともうまいといい喜んで食した

そして

「あ そうだここに来る途中なんか人が倒れとったからつれてきた
ぜ」

「だれだろ……お前かよ……」

そこには疲れ切った表情をしてぼーっとしている雷鬼がいた

「頭————酷いじゃないですか俺のこと置いていって」

「（い、言えない逃げるのに一生懸命で忘れてたなんて）」

「あの後村がどこにあるかわからないから一晩中

走り回って倒れとる時にこの人に拾ってもらったんすよ」

雷鬼が語ったように一晩中村を探して森の中をさまよい
クマを倒し『うらあー』虎を倒し『だらあー』

川に落ち『NOー』そしてようやく村の入り口にたどり着いたので
ある

「さて破龍 風き起きろーさっさと勢力拡大させにいくぞー」

「ういーす」

「わーた」

こうして鬼龍爆撃隊は大陸中にその名を広めるのである

最強の族 恋姫編 6 (後書き)

改めて読み返して

なんだこれ?と勝手にしまいました

感想お待ちしております

最強の族 恋姫編 7 (前書き)

恋姫のキャラをどう出しているかわからない
どうしよう

ま 読んでください

最強の族 恋姫編 7

鬼龍SIDE

鬼龍「アー腹減ったな――」

風鬼「かーしーらーその言葉32回目だよ！」

鬼龍「だって腹減ったんだもんよー」

破龍「だったら何でさっきの村で食糧もらってこねーんだよ！」

鬼龍「だってあの去り方が一番カッコいいと思ったんだから」

今俺鬼龍率いる鬼龍爆撃隊はキングジョーが頂点だった賊300人の中から

選りすぐりの強者100人選んで行き場も定かではない旅をしている
なんとなくて全員に単車を渡しておいた最初はみんな乗りこなせず
四苦八苦していたが今はみんな普通に乗りこなしている
マジでびっくりしたスゲー奴だったウィリーもしてるし・・・あつ、
こけた

鬼龍「ん、てめーら賊だぶちかますぞ！」

一同「よっしゃー久しぶりの飯だ――」

鬼龍「特攻隊長雷鬼！ー！」

雷鬼「ウス テメーラ行くぞ」

特攻隊「うおおおおおおお」
イヤーあいつ等気合入ってるなー やっぱ久しぶりの飯にありつけるからか？
ま いか

破龍「・・・・頭・・・・雷鬼に行かせたらあいつ勝手に食糧半分か
くらい食いますよ・・・」

と破龍が教えてくれたんだが・・・・え!?

鬼龍「おい 今なんて言った!! 食糧の半分がなくなるだ!!」

破龍「ええたぶん」

絶望的だ・・・・はっ!! こうしちゃー居られない

鬼龍「全軍突撃――雷鬼の暴挙を許すな――」

全員「うおら――」

S I D E O U T

雷鬼 S I D E

いま俺は気絶しそうになっている

それはなぜかというと目の前には夢にまで見た大量に食材が俺が指揮する特攻隊の皆もこの光景に涙を流す者もいる

これが夢の世界と言われたらここにいる全員がうなずくだろう

雷鬼「さていただ『までこらー』 ん？」

鬼龍「テメーまさか一人で全部食うきか!？」

風鬼「そうだ俺にも分ける」

破龍「もちろん俺にも分ける」

キングジョー「俺にわくれないんすか!！」

全員「俺にもくれー」

雷鬼「ちっわかったよ」

そして雷鬼が渋々分けようとしていると

???? 「何やってんだテメー等」

賊のお頭が現れたしかも手下約100人くらいつれている

それを見た鬼龍と鬼龍爆撃隊幹部5人は

鬼龍「100人かー2人行けば楽だな」自分が行くとは言わず

破龍「俺は今腹が減っててダメっす」腹が減ったと言って戦わず

風鬼「俺が行きます」なんか面白そーだから行ってくるという

キングジョー「俺は遠慮しときます」巻き込まれてはイケないと思

い諦め

雷鬼「だったら俺が行こう 空腹は最高のスパイスだっていうし」
飯がお預けになった鬱憤を晴らすために参加した

鬼龍「分かった風鬼 雷鬼行つて来い」

風鬼 雷鬼「うっす」

賊お頭「ふんたかが二人で何ができる てめーらぶっ殺せ!!」

賊『うら—————』

風鬼「足引っ張んなよ」

雷鬼「テメーだろ」

二人で軽い悪口を言い合ってる二人に100人の賊が襲いかかってきたが

「うりゃー」 雷鬼は近くにいた一人をまずは蹴りそれから頭突きをいれた

それからもう一度腹を思いっきり巴投げをかまし2 3人をまきこんで吹っ飛ばし

一方雷鬼はというと

「いりゃー!」 モンゴリアンチョップを入れて後藤のムラマサをいれ最後に

ブレーンバスターをかますと味方からも敵からも歓喜の声が上がった

そんな風に敵を30人くらい倒した時に事件は起こった

その事件の引き金を引いたのは一人の賊であつた

「こん化けもんがー」ドカッ

風鬼を後ろから木の棒で思いつきり叩いたのである

鬼龍 雷鬼 破龍 「「げ—————っ」「」

ぶちっ 「いてーなコノヤローてめーらぶっ殺してやらー」

最強の族 恋姫編7（後書き）

次回風鬼が大暴れます

だれかこの小説に合う名言を感想と一緒に投稿してください
できればクローズ ワーストでお願いします
全力を持って乗せたいと思います

最強の族 恋姫編 8 (前書き)

とても久しぶりな感じですが
相変わらずの駄文ですが読んでくれたらうれしいです
では どうぞ!!

最強の族 恋姫編 8

曹操SIDE

いま私たちは近くの賊の討伐に向かっているのだけど

「華琳様この辺りはもう調べつくしましたが見つかりません」

「そうやはりあの情報は嘘だったようね」

この私を騙したあの者許せないわ

「春蘭 秋蘭 桂花城に戻ったら私の閨に来なさい」

「「「華琳さま／＼／＼／」」」

ふふさてどうやってこの子達を可愛がってあげようかしらふふふ

そんなことを考えていると

「テメーラにげろー」

『うわ——』

何処からか叫び声が聞こえてくる

「！！華琳様お下がりください秋蘭 華琳様をお守りしろ季衣ついてこい」

「わかりましたー」

「分かったぞ姉者」

春蘭もなかなか指揮が上手くなってきたわね閨で一番可愛がってあげるとしよう

華琳SIDE OUT

鬼龍爆撃隊SIDE

「やめ 落ち着け風鬼俺だキングzy (ドカ) ぐへ」

いま俺たちはとてつもない光景を見ている元俺たちの頭の
キングジョーさんが一撃で倒されたからである

「テメーラなにぼさってしてんだよとっとと逃げるんだよ」

そう俺たちをせかすのは現俺らの頭キーコさん

「そうだぜあいつがキレた今俺ら全員でもあいつを止めるのは難しい
だろう」

そんな絶望しかわかない言葉をかけてくるのは特攻隊長の雷鬼さん

「今は逃げることだけを考えろ」

そして励ましてくれるのは強襲隊隊長の破龍さん

何でこんなことになったのかなー俺らはただ賊の食糧を強奪しに来

ただけなのになー

「テメーラ出口だ全力で行くぞー」

『うおおおおお』

だが

俺たちは甘く見ていた

風鬼という男の事を

「は——はっはっはっは俺から逃げるとは笑止愚か者どもが」
もう駄目かもしれないお母さん先立つ事をお許しください

そんな風に俺たち全員が神に祈っていると

現れたのだ

救世主が

「貴様らここで何をしている」
その救世主は黒髪をすべて後ろに回し大剣を肩に担いでいた

そこで真っ先に行動を起こしたのはキーコさん

「説明は後だ俺たちがこれから来るやつを抑えてるからその隙にそいつのほっぺたを

思いつきりひっぱたけ」

「う うむなにかよく分かんが分かった」

「頭―やつこさんのお出ました―」

「わかったよつと」がし

頭が風鬼さんの一撃をかわし後ろに回り込み動きを封じていると

「貴様にわ何の恨みもないが御免!!」

バッチ――ン

明らかにバッチ――ンという擬音が聞こえてくるようなキレのあるビンタだった

「さてお前たちはいったい何者かそしてここでいったい何をしていたか

華琳様の前で話してもらうぞ」

そして俺たち鬼龍爆撃隊の幹部 雷鬼さん 破龍さん (風鬼さんはビンタされて伸びている)

そしてさっき目を覚ましたキングジョーさん そしてキーコさんが曹操という人に会いに行ったのである

最強の族 恋姫編 8 (後書き)

本文を読んでてきずいた人もいるようですが
鬼龍のあだ名をキーコにしました
理由は何となくです

感想お待ちしております

最強の族 恋姫編9（前書き）

また久しぶりの更新です

なんかますます自分の文才の無さが浮き彫りに・・・

・・・は――

最強の族 恋姫編9

鬼龍SIDE

何で俺達はこんな威圧感たっぷりな視線を向けられているんだろう
お腹が痛くなってきた・・・は——まっ一応自己紹介しとこうか

「どうもこんちは、僕が鬼龍爆撃隊総長 鬼龍忠虎です」

「そう あたしが曹孟徳よ」

なんだと！！このちっけーのが霸王だと なんだか信じられんがま
とってる雰囲気か

霸王っぽいから霸王なんだろうな・・・俺の曹操のイメージが
音を立てて崩れてく・・・

「そうですか一応鬼龍爆撃隊幹部に自己紹介させておきましょう」

「どうも自分が強襲隊 隊長の破龍です」

「そして俺が特攻隊長の雷鬼です」

「それで俺が殿隊長の王情です」

「後それからその黒髪のお姉さんにぶっ飛ばされて気絶してる親
衛隊長 風鬼がいます」

そうして一応自分たちの自己紹介を済ました鬼龍爆撃隊幹部に対して

「あなたたちが自己紹介をしたのだからこちらも自己紹介をしな

「つたら礼を失するでしょうね」
覇王のオーラをビシビシ放ちながら自分たち側も自己紹介するよう
目で合図する曹操

「夏侯惇だ」と風鬼を思いっきりぶっ飛ばしたお姉さんが名乗り

「私は夏侯淵という」クールそうな青髪の女性が名乗った
ん？ちよつと待て確か夏侯惇が年上で夏侯淵が年下だったよな
ぜってー青髪の方が年上に思えるだってクールだし

ジ——

ん？なんかあの個性的なフードを被った娘からメンチ切られている
ような

「ふんっ」

・・・なんだあの態度

「曹操さんあそこの被り物した娘は？」

「ええ、彼女は荀？という者よ」

「ふーん知らねーわ」

なんか態度が気に食わんなー夜中最中にぶっ殺して朝方ぶっ生き返
してやろうかなー

「ボクは許緒だよ」

なんか最終的に目眩がしてきた 三國無双とかだったらみんないい
年したオッサンばかりなのに
みんな20歳いてないような外見だもんなー

そんなことを考えていると急に曹操さんが

「貴方、私に仕えなさい」

なんて言い出してきた

「華琳様！？」

曹操さんのところの人たち全員驚いちゃってるよ

一方俺たちの方かというと

「あんた一体何ぬかしてんだ？」と雷鬼

「冗談は髪型だけにしとけよテーマ」と破龍

「その髪の毛を恐怖で真っ白にされてーのか？」とキングジョーあれ？なんだか曹操さんの方の皆さんの雰囲気か

「貴様ら華琳様のありがたいお誘いを断りおって!」

雷「あんだとこのやろー！！」

あーうるせーなここは温和にいかないもんかなー？

「戦争をこの場でおっぱじめるかあ——！！！」

何でこいつらはこんなに血の氣が多いんだよだいぶイライラしてきた

イライライライライライライライライライライライライライライライ

イラブチ

鬼「うおら——」そして俺はついに切れた

[illegible]

「てめーら！俺たちはココに喧嘩売りにやってきたんじゃないねーだろーが」

それに俺はまだこの曹操さんに仕えるかどうか返事もしてねー!!
それをてめーら勝手なことぬかしてんじゃーねーぞこんバータレ
どもが」

「「「すつ、すいません」」」

よーやく落ち着いてくれたか んっ

「「「「・・・」」」」

何でだろう曹操さん達がなんか震えてるような気が…

「・・・曹操さん」

「なっ何かしら」

「あなたに仕えるかどうか返答はもう少し待ってもらえませんか？」

「分かったわ明日の昼ごろまた来てちょうだい」

「分かりました てめーら帰るぞ」

「「「はい」」」

は——緊張したそれにしても明日の昼までに返答か・・・戻った
ら隊の奴らに話すか・・・

SIDE OUT

こうして覇王との対談一回目は幕を閉じたのである

最強の族 恋姫編9（後書き）

いかがでしょうか今回はあの霸王さん達とからませてみなした
口調とか「ここちがうくね？」と思っただけひ悪い点として書いて
下さい

全力で直します

では次の話で合いましたよう

最強の族 恋姫編10（前書き）

お久しぶりです
相変わらずの駄文です
申し訳ございません

最強の族 恋姫編10

鬼龍爆撃隊幹部室

今ここでは鬼龍爆撃隊総長及び幹部がそろって幹部会が開かれている

総隊長 キーコ（鬼龍）

強襲隊長 破龍

特攻隊長 雷鬼

親衛隊隊長 風鬼

殿隊長 キングジョー

キングジョーは椅子に腰かけ他の者は麻雀卓を囲んでいる

鬼「で、どうだった各隊の反応は？」

キ「俺らん所は頭の選んだ道にただ従うのみだそうです」

風「自分らの所はほとんどの奴らが曹操に仕えてもいいと言っています、ですけど少数ですが仕えたところで

ただの捨て駒として扱われるだけだから仕えたくないだそうです」

破「強襲隊の奴らは反対の者がほとんどです俺らの隊は昔傭兵やっ
とったやつが沢山いてそいつが

その傭兵時代の経験からしてろくなもんじゃーないという理由
で反対していました」

鬼「ふーん、ところで特攻隊の状況は？」

雷「俺らん所はキングジョーんと一緒に頭に任せるだそうです・
・」

そして雷鬼は黙って何か思い悩む姿を見せる

鬼「どうしたんだ雷鬼？ ついでに言うとその白もらって國土無双だ
！」

雷「ぬおー！！」

風 破「あーあ可哀想に」

キングジョーは麻雀のルールがさっぱりわからないので蚊帳の外で
ある

そんな中幹部室の戸を叩くものが現れた

「ういー今あけるけーまっとれ」そこに立っていたのは一人の少女
である

キ「ん、何の用だ？ 嬢ちゃん」

キングジョーは自分では普通に聞いたと思っているがもともと顔が
怖かったので少女は怯えている

少女「ひっ」

そして麻雀をしていた4人が全員キングジョーを睨む

鬼「こら何睨んでんだよ」

破「テメーはもともと凶悪な面してんだからひっこんどれ」

風「マジでテメー顔が怖いんだよ俺の拳で整形してやろーか!？」

雷「あれ? あんた確か」

少女「はい、私は特攻隊副隊長の黄龍と申します」

鬼「で、その特攻副隊長が何の用？」

黄「はい、少し二人で話したいことがありますて・・・」
そういうと黄龍は下を向き少し肩をふるわしていた

鬼（どうしようなんか俺が悪者みたいになってる・・・どうしよう）

鬼龍は何も言葉を発せず オロオロしているだけである

鬼「わかった だったら少し場所を変えよう おいキングジョー!
破龍達にやり方聞いて代打ちやっつけ」

キ「分かりました」

鬼「さっ、場所変えようか」

黄「はい」

一森一

フォンフォン

キッ

鬼「ここまで来ればいいだろ」

そういうと鬼龍は木の根本に腰を下ろしタバコを銜えマッチで火をつける

鬼「で、いったいどんな話があるの？」鬼龍は紫煙をはきながら訪ねた

黄「はい・・・お願いです曹操さんの下に付かないでください」

鬼「フー どうして？」

黄「それには私の昔の話をしなければいけません・・・きいていただけですか」

鬼「いいよ、おまえの悩みを全部聞いてやる気が済むまで話せ」

黄「分かりました何か疑問に思ったことがあったら挙手をしてください」

黄龍がそういうと鬼龍がスッと手を挙げた何か疑問を抱えているように

黄「はい何でしょう」

鬼「なあ」

黄「はい？」

鬼「挙手って何？」

黄「・・・・・・・・・・今貴方がしたことです」

鬼「・・・・・・・・分りました」

消えてしまいそうな小さな声で分りましたと言い下を向いてしまった鬼龍を

見て黄龍がついドキッとしたのは誰にもいえない

そして黄龍は重い口調で自分の昔の話始めた

そう、自分が曹操の下で戦っていたことを・・・・・・・・

最強の族 恋姫編10（後書き）

この話を読んだ方で少しでも続きが気になった人がいればがんばって書きますが

最近本気で自信をなくしてきました

ご意見・ご感想お待ちしております

最強の族 恋姫編11（前書き）

お気に入り登録数が減ってきている
もう少し更新ペースを上げようと思います

では本編をお楽しみください

最強の族 恋姫編 11

鬼「ただい『はい、それローン!』まー……」

風「だーくそー」

雷「お前マジ強ーよ」

破「くそつたれ 後チョイで國士だったのに……」

今鬼龍は自分の目を疑っている麻雀初心者のキングジョーが破龍達にボロ勝ちしていたのだから

「「「おかえんなさい」「」」」

鬼「ところで曹操^{さう}様に仕えるかどうか結論が出た」

黄龍との話し合いから自分が曹操に仕えるかどうか決心が付いたのである

雷「別に 俺たちはあんたが出した答えについてだけです

鬼「俺たちは曹操様の下には仕えない」

いきなり結論を出されてみんな驚いている様子である
がすぐに平常心を取り戻している

その中でその結論に疑問を抱いて手を挙げる者がいた

破龍である

破「頭、理由を聞いても良いでしょうか」

鬼龍はタバコに火をつけ答える

鬼「さっきこの部屋の扉を叩いた娘が関係するんだが あいつは昔

曹操様の下で戦っていたそうなんだ

だけどそんな時心はかなり深い傷を負ったらしーんだわ そんな奴をまたその場所に連れ戻すような

真似はできねーよ」

言い終えると鬼龍はゆっくり紫煙で輪っかを作りながらゆっくりはいた

破「そうですか」

鬼「話は終わりだ明日には曹操様達に仕えないという事を言いに行かなきゃいけないから

早めに寝よーぜ」

「「「はーい」「」」

曹操SIDE

あのとき鬼龍が自分の部下を叱るときに見せたあの殺気もしくは気迫について考えている

あの殺気は何者かを叱る程度で出せる殺気ではない

あの殺気には必ず殺すという意志があった 春蘭でさえあれほどの殺気を出すのは難しいでしょう

「やはり欲しいはね あの者」

そして私は明日あの者が出す答えが我が覇道を確実にする物であることを願い眠りについた

S I D E O U T

翌日

鬼「あー眠い」

鬼龍は今破龍が運転してくれている單車に乗って曹操の下に向かっている

單車を走らせること数分

鬼「あーやっと到着いた〜」

曹「よく来たわね」

鬼「どうも曹操さん、それから夏侯惇さん夏侯淵さん」

夏侯惇「ふん」

夏侯淵「こら、姉者」

夏侯惇は鬼龍が気に入らないのか不機嫌なのを隠そうとせず鼻を鳴

らす

そんな姉を宥めるかのように夏侯淵は姉の名を呼んだ

鬼「曹操さん今日は貴方に仕えるかどうかの答えを伝えに来ました
自分は貴方

と二人で腹を切って話合いたいから此処に来ました」

曹「・・・腹を割ってでしょう」

鬼「え!？」

夏侯惇「ふん、馬鹿が」

ここで夏侯惇が心の底から鬼龍を馬鹿にしたから破龍は激怒し夏侯惇に殴りかかろうとしたが
鬼龍の拳骨がそれを止めた

鬼「てめーは何でそうやって直ぐきれるんだ落ち着きをもてバータ
レが! すいませんが

夏侯惇さんこいつと腕相撲でもしてやってつかーさい」

夏侯惇「分かった」

そう答えると夏侯惇は破龍と共に何処かへ消えていつてしまった
夏侯淵はというと気付いたときにはもういなかった

曹「で、私に仕える気になったかしら」

鬼「そういえばその話をしに来たんでしたね、結論から言えば自分
たち鬼龍爆撃隊は

貴方の下には仕えません」

曹「それは何故かしら? 誰かが使えて欲しくないと言ったのかしら
?」

鬼「はい、そのとおり自分のところの者がどうしても貴方の下には
仕えたくないと言って

이었습니다ので」

曹「そう・・・・・・・・」

鬼「ですが、あなた達がどうしても俺たちの力が必要な時があれば俺たちは

喜んであなた達に力をお貸しいたします」

曹「傭兵という訳ね、貴方はそれで良いの？ 貴方が持っている力をすべて使えば

この大陸を手中に収めることは簡単でしょうそれが適わなくても高い位にはなれるのではなくて このままだったら低い身分のまままで終わってしまうわ」

鬼「貴方は俺のことを高く評価しすぎてる 俺はあんたが思うほどたいした男じゃありませんよ

それに身分が低くて良いじゃないですか、身分が高かったら何かと不便でやってられんですよ」

曹操は何かに気づいたように大声で笑い出したのである

そして口を開いた

巢「本当に面白い男ね、今のところは我慢しまししょうでも必ず私の所有物にするは」

鬼「望むところだよ、そんな代わり俺たちを思うように操るのは骨が折れますよ」

曹「ところで貴方は春蘭もう一人は秋蘭と戦ってみなさい」

鬼「良いですよ」

そうして春蘭VSキーコ 秋蘭VS破龍の対決が始まったのである

最強の族 恋姫編11（後書き）

ワーストで高橋さんが書いていた言葉をまねてみました
「社会的地位が高いと何かと不便で仕方ねーは！」
イイ言葉だと思います

感想・ご意見 誤字脱字の注意お待ちしております

最強の族 恋姫編12（前書き）

久しぶりの戦闘描写
やっぱ難しいです

では相変わらずの駄文ですが読んでください

最強の族 恋姫編12

曹「春蘭！秋蘭」

鬼「破龍！」

今俺は破龍を 曹操さんは夏侯惇さん 夏侯淵さんを呼びにやってきた

破「ういーす」

夏侯惇・淵「はっ！」

鬼「夏侯惇さんは俺と」

曹「秋蘭はその男と戦うことになったわ」

おお、何か3人ともやる気がみなぎっているようだな

夏侯惇さんなんかもうすでに武器抜いてやがる………死ぬかもしれないねーなー

シュボ ふー

「「「なっ！！」」」

何かタバコ吸ってるだけで驚かれるし 疲れるなー

鬼「破龍先にお前が行け メインの勝負は後にとっというて観客を沸かせろ」

破「分かったわい」

破龍の闘志がぐんぐん上がっておるのー

夏侯惇「秋蘭 華琳さまのために早く勝ってこい」

夏侯淵「分かった、おまけは任せておけ」

ほほー 破龍の事をおまけとは自信があるなー

曹「両者前へ」

曹操さんが審判をやるようだ・・・夏侯淵さんは弓矢で戦うようだな
対して破龍は素手で戦うから接近戦に持ち込まなきゃ勝機
はねーな・・・

曹「始め」

まずわ夏侯淵さんが矢を放つ

それを破龍は体を少しずらしその矢を避け駆け出し相手に急接近し
アッパー
を繰り出すが

破「ふっ」

夏侯淵さんはそれを余裕の表情でかわし矢を一本片手に持ち破龍の
太腿に突き刺した

破「ぐあああああ!!」

曹「秋蘭!」

鬼「大丈夫ですよ、破龍^{あいっ}はあんな細っけー矢何かじゃー膝を付いた
り何かしませんよ」

明らかに太腿を矢が貫通しているのに破龍は笑っている

破「いてーなコノヤロー　フンッ」

不適に笑って自分の太腿に刺さっている矢を力一杯抜いた　そして
その矢を夏侯淵さんに向けて投げる

それを夏侯淵さんは何事もなっかたかのように打ち落とすが

夏侯淵「なっ!　いないだど」

矢を打ち落とすために矢だけに神経を集中していたせいか破龍がど
こに行ったか分かっていないようだ

夏侯惇「秋蘭、上だ！」

夏侯淵「なに！」

破龍が自分の上にいると気付いた夏侯淵さんは矢を三本破龍の足に放ち

見事に突き刺さったが

破「効かんわ！」

見事に延髄切りをきやがった！

夏侯淵さんは力が抜けたように倒れ

一方の破龍は足に刺さった矢を力任せに抜いたせいか血がめっちゃくちゃ出てる

あ、倒れやがった

曹「この勝負は引き分けて良いかしら？」

鬼「そうですね」

こうして夏侯淵対破龍の勝負は引き分けて幕を閉じたのである

鬼「はー、次は俺の番か・・・」

湯鬱だなー

最強の族 恋姫編12（後書き）

誤字脱字の注意

感想・ご意見お待ちしております

最強の族 恋姫編13（前書き）

お久しぶりです

前回に続き戦闘描写です

夏侯惇の名を出し過ぎた感じがします

駄文ですが読んでください

最強の族 恋姫編13

今鬼龍は夏侯惇に睨まれながらタバコを吸っている

その吸い殻を携帯灰皿に入れ睨みをきかせている夏侯惇を見る
(めえっさ怖ええええ)

それが初めて魏武の大剣と対峙したときの感想であった

夏侯惇「何処からでもかかってこい」

鬼「はー、俺そんなに女殴るの好きじゃねーんだけどなー」

夏侯惇「ふん、怖じ気づいたのか」

そう言うとき夏侯惇は愉快そうに笑い出した

鬼「あんたが本気で来るならワシはそれに本気で答えなけりゃーい
かんけーのー」

鬼龍は上着の革ジャンを脱ぎながら言った

鬼「それに怖じ気づいたなんて引き下がるわけにもいかんけー全力
で相手しちゃうわ」

そして鬼龍は片手を強く握りしめもう片方の手の平でヒョイツと挑
発する

夏侯惇「調子に乗るなーはあああああああ」

夏侯惇が自分の得物である大剣を横に一閃

鬼龍はそれを上半身を後ろに下げ避けてから夏侯惇の腹に膝蹴りを
入れたら

夏侯惇「効かん！」

思いつきり左の拳を入れられた

鬼「ぬお」

半端ない威力が有ったらしく鬼龍はかなり吹っ飛んだ

その後鬼龍は起きあがり

鬼「なかなかやるのー大剣の一撃も早かったし拳の一撃もかなり早くて威力もあるな」

曹「何処を向いてしゃべってるの」

夏侯惇「私はこっちだ！」

曹操の方を見てしゃべっていた・・・

鬼「へ？・・・ホントだ・・・だけどそんなんじゃー俺は倒せねーぜ！」

そして鬼龍は今倒さなきゃならない相手に向かって思いつきり走り出した

夏侯惇「早いだけでは私は倒せん！」

大剣を今度は縦に力一杯振り下ろした

鬼「ふっ」

それを横に一步動きかわして足払いをきめた

夏侯惇「ぐっ！」

バランスを崩し尻餅をついた夏侯惇から後ろに大きくジャンプし距離をとり一息つく

鬼「ふーめんどくせー」

一息ついてたらその間に立ち上がった夏侯惇が横薙に大剣を振ってきた

鬼「あつぶねーだろーが！」

それをしゃがんで避け片腕をつき夏侯惇の顎めがけ蹴りを食らわす
いわゆる穿弓腿である

夏侯惇「ガハ」

鬼「まだ倒れねーか」

夏侯惇はまだその闘志を消さずに鬼龍に向かって向かって行くがその手には自分の大剣は握られていない

鬼「これで終わりだー！」

鬼龍もこの一撃で勝負を決めるため走り出し超人的な跳躍力を見せて
両膝を相手の首もとに入れ
体を後ろに反らしフランケンシュタイナーをきめる この一撃で夏侯惇は意識を手放し

曹「勝者は鬼龍」

鬼龍忠虎の勝利で終わった

最強の族 恋姫編13（後書き）

やっぱり一対一の戦いは苦手です

乱闘が一番書きやすいです

この投稿でまたお気に入り件数が減るでしょう

・・・はあー

誤字脱字 感想ご意見お待ちしております

最強の族 恋姫編14（前書き）

もうすぐ冬休み

作者はテンションが高いので投稿しました

最強の族 恋姫編14

鬼「ふー、しんど・・・」

曹「まさか春蘭を倒すとはね」

鬼龍は夏侯惇を倒し今はその場に大の字に寝ころんでいる
そして自分が絶対の信頼を寄せる部下を倒した男をただ見つめている

破「頭はやっぱすげーわ」

いつの間にか目を覚まし鬼龍VS夏侯惇の勝負を見守っていた破龍
はタバコに火をつけて
胡座をかいている

鬼「どーでも良いこと言ってねーで俺にもタバコくれ」
破「ほい」

そうして鬼龍は破龍の隣に腰を下ろし夏侯惇の強さについて考える
ことにした

（あの人は何であそこまで戦えるんだろう俺のパンチやケリはたい
ていの奴なら

一発で意識を失ってもおかしくねーはずなのに・・・」

鬼「よし！考えるのやめよう 破龍もう一本くれ」

破「何で考えるのやめたら俺のタバコ挙げなきゃいけないんですか、
吸い過ぎには注意

してくださいよ、はい」

そうしてしばらくタバコを吸っていると
隣に曹操が座ってきた

曹「あなた達もう一度言うわ、正式に私に仕えない？」

鬼「ふー、貴方も大分しつこいですねー俺は貴方に傭兵としてなら
仕えますって」

破「俺は頭のきめた道を歩むだけです」

そうして二人は単車に乗り自分たちの仲間が待っててくれる場所に
帰って行こうとしたが

鬼「あ、そうだ曹操さん『華琳よ』え？」

曹「あなた達二人に私の真名を預けるは」

鬼「では華琳さん夏侯惇さんが目覚めたらまた何時か喧嘩しましよ
うって」

破「夏侯淵さんにもいってください、俺は本気の半分しか出し
てません今より十倍強くなったら

俺は負けるかもしれない、だからもっと修行して強くなってか
らかかってきんちゃい」

鬼「生意気言ってんじゃねーよ」

鬼龍は破龍に拳骨を食らわしてから少し説教をしてから 単車で帰
っていった

そして曹操軍の中で夏侯惇將軍を倒した数少ない男として長い間語
り継がれていくのであった

夏候惇「はっ、秋蘭あの男達は・・・」

夏候淵「姉者 あの二人はもう帰ったそうだ」

夏候惇より少し早く目を覚ました夏候淵が毛布を持ってやってきた破龍の蹴りの衝撃がまだ残っているらしくまだ足下がふらついていた夏候淵「姉者、私と戦った者が私にもっと強くなってから勝負しようと言っていたそうだ、

それから姉者と戦っていたあの鬼龍という者がまた何時か勝負しようだそうだ」

夏候惇「秋蘭！もっともっと強くなってから彼奴らを倒そうでわな
いか！」

夏候淵「勿論だ姉者」

（鬼龍）

鬼「ブエツキシ」

破「ファツクシュン」

俺は何故かいきなりくしゃみをして飲みかけていた酒を破龍の顔に向かってぶっかけていた

破龍もクシヤミをして俺の顔に酒をぶちまけていた

破・鬼「汚ねーなー」

今俺たちは曹操さんの居城近くの酒屋で酒を飲んでいた（飲酒運転などこの俺たちには関係ない）

俺達は酒を飲みながら今日喧嘩した夏侯惇さんと夏侯淵さんについて話し合っていた

鬼「おめー足大丈夫か」

俺はあの試合の後から破龍の足のことを心配していた

破「どーってこと無いっすよ、もう傷も塞がってるし」

破龍はもう足の傷も塞がり傷跡すら残っていなかった

鬼「さーて帰ーるか破龍お勘定よろしく」

破「え！？勘定は頭がしてくれるんじゃないんですか」

俺が他人に奢る？こいつは馬鹿か？そんなことをするのは俺がパチンコで勝った時か

女性に対してだけだ

それに

鬼「ふふふ、俺は今金を持っていない」

破「俺もっす」

鬼・破「「ははは・・・虚しいな（っすね）」

今すぐこの酒屋を出ようとしていると後ろから太い腕が俺達の肩をガツチリ掴んでいた
俺は引きつった笑顔で後ろを向いたらにっこり笑って領収書を持ってたがたいの良いいオヤジさんがいた

「あんたら食い逃げしようとしただろ」

オヤジさんは俺と破龍を持ち上げて上下に揺らしている・・・吐きそう・・・

「金がないんだったら、タダ働きしろ」

OH やっぱり言うと思った 俺は元々バイトとか好きだったから
良いけど破龍こいつは

破「上等だよ やってやんよ」

やる気はあるようだ、

やっぱり料理とか作ったり酒の配達とかやるんだろうか？

やっぱり風鬼達に連絡入れなきゃ何ねーだろうな

鬼「オヤジさん筆と書く物有りますか？」

そして俺はオヤジさんから筆と竹の板をもらってから

風鬼当てに手紙を書き懷から鴉を取りだし足に竹の板をくくりつけ
飛ばした

鬼「オヤジさん 寝床は？」

オ「奥の部屋使え」

ハー、俺は早く曹操さんの下から姿をくもらしたいのに

オ「早く手伝え」

鬼・破「「へーい」」

最強の族 恋姫編14（後書き）

何か中途半端な終わり方ではありません

何とか早く更新したいんですが一日30分しかパソコンを使えない物で・・・

その上文才が無いもので

文才が欲しい

感想ご意見何時でもお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0590t/>

真・恋姫夢想 ～最強の頭～

2011年12月19日21時55分発行